

福山市神辺町所在

御領遺跡（第6次調査）

—遺跡見学会資料—

日時：平成25年6月29日（土）13:30～

主催：公益財団法人広島県教育事業団

福山市教育委員会

1 はじめに

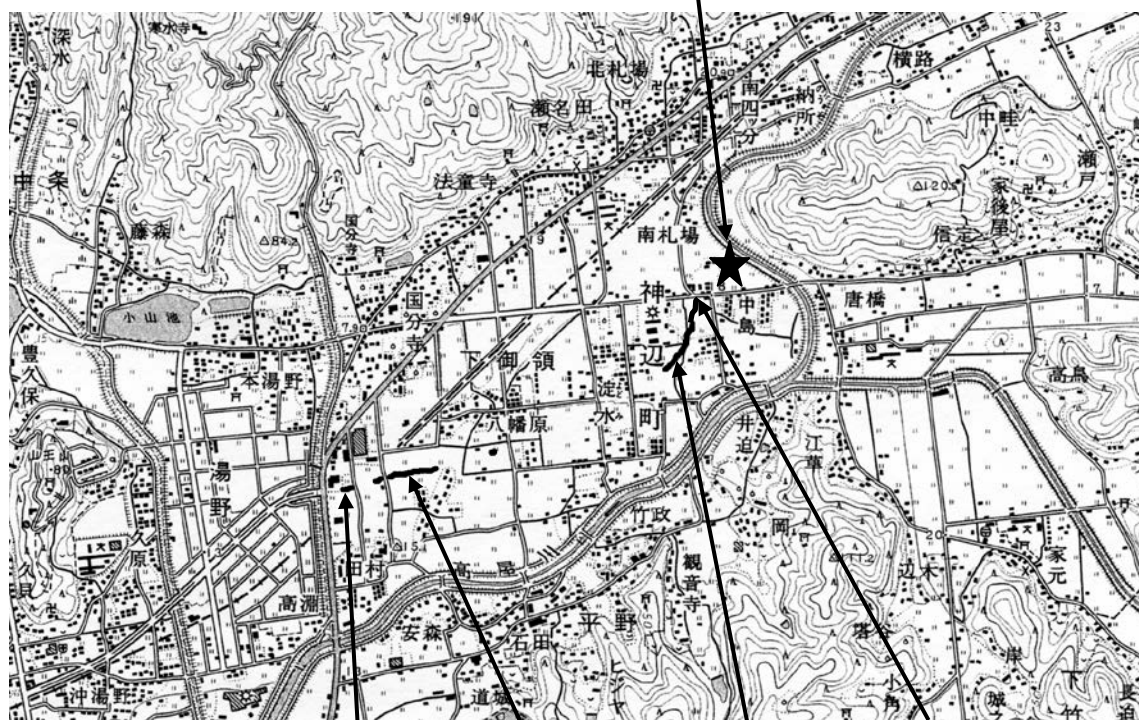
御領遺跡は、福山市神辺町の下御領から上御領にかけて、東西約1.6km、南北約1.4kmの範囲に広がる県内でも屈指の面積を持つ縄文時代後期～中世にかけての遺跡です。遺跡の北西には備後国分寺があり、古代では山陽道が通過している場所でした。また、近世から近代さらに現代でも西国街道や国道・県道が交差する交通の要衝です。

周辺の遺跡としては西側に堂々川を挟んで大宮遺跡、さらに西側には亀山遺跡があります。また、平野の南北両側の山塊には古墳群が多数存在しています。

御領遺跡では、昭和53～54（1978～79）年にかけて実施された国鉄井原線建設に伴う発掘調査をはじめ、30年以上にわたって断続的に発掘調査が行われています。

国道313号道路改良事業に伴う御領遺跡の発掘調査は、平成20年から実施し、今年度で6年目の調査になります。前年度までの調査は、御領遺跡の西側と東側で行いましたが、今年度は御領遺跡の東端に当たる場所で調査を行っています。今回の調査期間は、4月～7月上旬の予定です。

第6次調査



第1次調査

第2・3次調査

第4次調査

第5次調査

2 既往の調査

国道 313 号道路改良事業に伴う第 1～5 次調査の成果について少しまとめておきます。

第 1 次調査 竪穴住居跡 1, 竪穴住居状遺構 6, 掘立柱建物跡 4, 土坑 3, 多数のピット, 自然流路など縄文時代晩期～古墳時代前半頃の遺構を確認しています。古墳時代の竪穴住居状遺構から多くの高杯や小形の丸底壺, 滑石製の双孔円盤, 土玉, 土製管玉などが出土しており, 何らかの祭祀にかかわる遺構と推測されます。

第 2 次調査 竪穴住居跡 35, 掘立柱建物跡 16, 土坑 87, 溝状遺構 7, 性格不明遺構 15 を確認しています。これらの遺構は縄文時代後期～晩期と弥生時代後期～古墳時代の 2 時期に大きく分かれます。縄文時代の遺構としては, 竪穴住居跡や埋甕を検出しました。弥生時代の遺構としては, 竪穴住居跡や中期後半から後期にかけての大溝を確認しました。

第 3 次調査 溝状遺構 5 と土坑 3 など弥生時代～古墳時代の遺構を確認しています。このうち, 第 2 次調査で調査した大溝の続きの溝状遺構も確認したほか, 止水施設と考えられる大量の木材や突き刺さった杭が出土した溝状遺構も確認しました。また, 井戸と考えられる土坑があります。

第 4 次調査 竪穴住居跡 11, 掘立柱建物跡 7, 土坑 14, 溝状遺構 11, 自然流路 1, 多数のピットを確認しています。竪穴住居跡は主に弥生時代後期頃と古墳時代後期頃のものです。掘立柱建物跡のうち古代前半頃の 5 棟は調査区の南東寄りにあり, 建物の向きがほぼ東西南北に平行する建物群です。土坑のなかで円形のは, 弥生時代から古墳時代の井戸の可能性がありま。溝状遺構には弥生時代中期頃のものや弥生時代末～古墳時代初頭頃の土器類が多量に出土するものがありました。自然流路は, 幅約 15m, 検出面からの深さ約 1.3m の規模で, 縄文時代～古代前半の遺物が多く出土しています。

第 5 次調査 竪穴住居跡 3, 溝状遺構 2, 土坑 14, 性格不明遺構 8 のほか多くのピットを確認しています。竪穴住居跡は弥生時代中期と古墳時代前半頃のものです。溝状遺構は古墳時代前半期のもので, 第 4 次調査でも確認されています。土坑のうち円形状のものは古墳時代前半期で, 第 4 次調査でも同時期の建物群が確認されています。このように第 5 次調査区から第 4 次調査区にかけて弥生時代から古代前半の集落が広がっていたと考えられ, また, 本調査区周辺は御領遺跡の中でも遺構が密集する地点の一つと考えられます。



第 6 次調査区 (アミ目)

3 今年度の調査

今年度の調査区は、第5次調査区の北側に位置する調査区です。なお、本調査区と第5次調査区との間に第7次調査区（本年度調査予定）があります。

溝状遺構（SD）1，土坑（SX）2のほか多くの土取跡を確認しました。

溝状遺構（SD1）は調査区のほぼ中央部を東西に横切っています。現状で確認できた長さは約20m，幅は場所によって少し違いますが約2m，深さは約40cmで，東側が西側に比べて溝の底が低いことから，西から東に向けて流れていたと思われます。溝底面には浅いU字形の小さな溝が2条残っています。これらの溝は溝の改修などによるものと思われるのですが，切り合い（新旧）関係も明確でなく並行していることなどから，比較的短期間の改修あるいは並行（同時）使用も考えられます。溝の中からは弥生時代前期末頃から弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の土器を中心に土製品（分銅形土製品，紡錘車？），石器（スクレイパー，石鏃，石錘，石錐，ハンマートーン，石包丁）などが出土しています。遺物は溝の上層から下層まで，また溝全体に渡り密集した状態で出土しています。

土坑（SX1・2）は幅約1.5mの不整形をしています，深さは1m以上で土坑内部からは弥生時代後期の土器が出土しています。この土坑は井戸の可能性がありま

す。土取跡は近代から現代まで当地域で盛んに行われた瓦生産に関わるもので調査区の全域にその痕跡が存在します。形状は円形，方形，長方形，溝状など様々なものが確認できます。深さも浅いものから深いものまで様々ですが，いずれも黄褐色の粘質土が採取対象となっており，深いものでは粘質土層の下部にある青灰色グライ土層まで掘り込まれているものもあります。

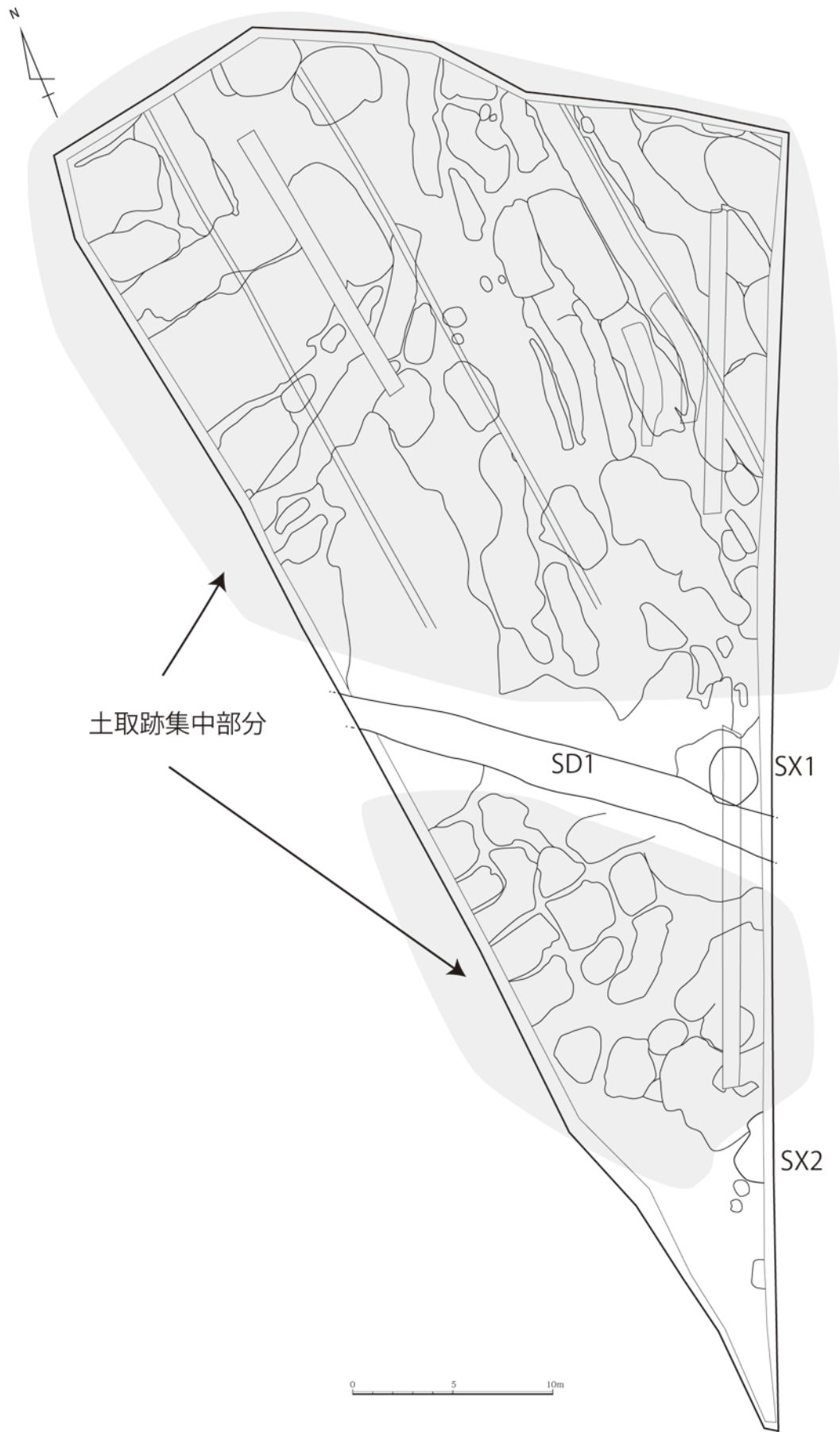
4 まとめにかえて

今回の調査で確認した溝状遺構は調査区の東西両側に延びています。試掘調査の結果，西側部分について，遺構は土取りでそれほど広がって（遺存して）いないようです。東側部分についてはさらに延びる可能性があります。溝状遺構の時期については概ね弥生時代前期から後期・古墳時代初頭頃と思われます。

本調査区では，遺構の多くは土取に伴って破壊された可能性が大きく，溝状遺構も後世に遺物が堆積した二次的遺構の可能性がありま

す。出土遺物は他の集落遺跡に比べても圧倒的に多く，このことは近辺で長期にわたり多くの人々が生活していたことを物語っていると考えられます。

第4・5次調査区は御領遺跡の中でも遺構が多い場所です。本調査区は第4・5次調査区から北東へ少し離れていますが，調査の結果，たくさんの遺物が確認できたことから，少なくとも現在の高屋川の周辺まで集落が広がっていたことが確認されました。



第6次調査区遺構配置図